

Title	博物誌資料としての『お湯殿の上の日記』
Sub Title	“Oyudono no ue no nikki” (a diary of the events in the imperial court, recorded by the ladies-in-waiting) as material for natural history
Author	磯野, 直秀(Isono, Naohide)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2006
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 自然科学 No.40 (2006. 9) ,p.33- 49
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10079809-20060930-0033

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

博物誌資料としての『お湯殿の上の日記』

磯野直秀

“Oyudono no Ue no Nikki” (a diary of the events in the Imperial Court, recorded by the ladies-in-waiting) as Material for Natural History

Naohide ISONO

1 はじめに

博物誌の歴史を調べるとき、①ある種類の動植物を、いつ頃ほかの種類から区別して認識するようになったか、②ある種類の動植物名を、いつ頃から現在の和名で呼ぶようになったか、③外国産の動植物が、それぞれ何時初めて渡来したのか、などを探ることが大きな課題となる。

18世紀以降は本草家・博物家の図譜・著述などが数多く残っているので、それを利用して探索を進められるが、17世紀にはそのような図譜・著述が少なく、探索が制約される。それを打開する一つの手段が描写年月日の書き入れがある画家のスケッチ集であり、幸いにも私はその条件を満たす17世紀後半のスケッチ集3点に出会って、それなりの成果を報告することができた(注1)。

しかし、さらに室町時代の頃に遡ると、本草家の著作はもとより、上記のようなスケッチ集も激減してしまう。そのとき資料となるのは、辞書や日記類である。もっとも、両者とも図は伴わないし、形状を詳しく述べることも少ないので、記されている動植物名が現在と同じ名称であっても、果して現在の種類を指すかどうか判断できないのが最大の欠点である。また、辞書類は原本が現存することは稀有であるし、版本がほとんど無い時代なので転写本で伝わるが、転写に際して増補したり、書き換えたりして制作時の姿と変わっていることも稀ではない。

そのなかで、宣教師の作成した『日葡辞書』は印刷されたものであるし、形状の説明も多少は付されている語が少なくないので、先にその動物名を調べて報文を記した(注2)。

日記類も転写本として伝わるが、資料の性格から転写者が増補・訂正する可能性が少ない点
が、辞書類より優れている。ただし、男性の日記は漢文体が普通で、用語も漢名を用いること

〒 232-0066 横浜市南区六ツ川 3-76-3-D210, 慶應義塾大学名誉教授。(76-3-D210, 3-chome, Mutsukawa, Minami-ku, Yokohama 232-0066, Japan; Professor Emeritus, Keio Univ.) [Received Mar. 4, 2006]

が多く、当時世間で使われていた日常的な呼び方を知るにはやや難がある。その点まで考慮すると、浮かび上がってくるのは『お湯殿の上の日記』である。

『お湯殿の上の日記』は禁中（朝廷）の女官たち（注3）が記し続けてきた日記で、禁中での行事や遊び、出仕する人々や公家・将軍家の消息のほか、京都内外の事件、来訪者、献上・下賜の品々などを記録する。文明9年（1477）から貞享4年（1687）までの分は翻刻されている（注4）が、失われた個所がいくつもあり、たとえば文亀元年（1501）～大永5年（1525）は元旦記事だけだし、慶長16年（1611）～延宝2年（1674）の期間は、寛永2年（1625）1年分が残るだけである。

そのような制約はあるが、献上・下賜などの記録は室町時代から江戸時代前期にかけての動植物についての優れた資料である。たとえば、文明9年（1477）5月18日条には「むろまち殿[足利将軍]より、いきたるかひあわひ[アワビ]まいる」（注5）、同7月6日条には「御たい[日野富子]より、せんおうけ[仙翁花]まいる」の記事が含まれている。日記はこのように平仮名主体で記されており、原文には濁点や句読点が無いとか、女官特有の御所言葉（女房詞：たとえば、タラを「ゆきの御まな」と記す。タラ＝鱈からの名）が多出することなどによって意味が取りにくい個所もあるものの、全体としては読みやすい。

日記は多くの女官が代わる代わる筆を取ったらしいが、それぞれの好みが当然反映されており、ある部分は草木の種類をかなり詳しく記しているが、他の部分では品名を挙げずに「草花まいる」でみな済ませている、という具合である。つまり、日記は連続していても動植物の取り上げ方に精粗が見られるのが欠点だが、季節の果物やキノコの献上などは種類や量が概して詳しく記されている。全体的に見れば、動植物についての記事はけっして少なくない。本報では、その『お湯殿の上の日記』の一端を紹介してみたい。

なお、室町時代の日記のうち、禁中にも出仕していた公家山科言継とぎつぐの『言継卿記』（注6）、山科家に仕えた家礼けらい（雑掌）の記録『山科家礼記』（注7）、蔭涼軒主代々の記録『蔭涼軒日録いんりょう』（注8）は『お湯殿の上の日記』と時代的に重なるし、しばしば草木・魚鳥に筆が及ぶので、ときにその記事も取り上げた。また、前2者にはそれぞれ稿末の1節を充てた。

2 植物の記述

(1) 初出植物名

『お湯殿の上の日記』には、生花用・庭園用の草木、食用の果物・野菜・キノコなど、多数の植物名が含まれている。そのうちには、これまでの調査の範囲内で、本書の記載が初出らしいと思われる種類も少なくない。その現和名と記載年月日（①②……は閏月）を、以下に示す。複数の記載がある場合はもっとも早い例を挙げた。ただし、花銘と御所言葉（女房詞）は取り上げていない。配列は五十音順、「：」の後には記載名（「」内）と現和名との異同や、関連する事例などを注記した。「氷砂糖」は植物ではないが、砂糖は当時貴重品として贈答にしばしば用いたので、関連項目として末尾に付した。

ウメモドキ	元龜3 (1572)・8・16:「梅もとき」
カラボケ	慶長4 (1599)・3・19
キノカツギ	文明9 (1477)・11・17:「きぬかつぎの <u>まも</u> [芋]」
サマツタケ	明応4 (1495)・4・28
ジネンジョ	慶長6 (1601)・2・3
スズタケ (篠竹)	文明12 (1480)・9・13
ダイダイ	永祿7 (1564)・2・3:「たいたい」
ツクネイモ	寛永2 (1625)・12・25
テマリバナ	天文21 (1552)・2・6:オオデマリの別称か
トウキビ	永祿4 (1561)・10・7:モロコシの別称?, 生花用/トウモロコシの 伝来前と思われるので, その別称ではない
トウクネンボ	天和3 (1683)・10・20:ザボンの一品種ウチムラサキの別称/「紫ザ ボン」は寛文7年(1667)に渡来(長崎洋学 史)
ニンジン	慶長13 (1608)・2・22:「女三の宮の御かたより, にんしん, 一ふた [一盆] まいる」——この書き方を見ると, 野 菜の人参と思われる
ネズタケ (鼠茸)	文明14 (1482)・8・28:現ホウキダケの別名
ハクモクレン	延宝5 (1677)・2・25:「白もくれんの花」
ヒメウリ	天文11 (1542)・6・10:マクワウリの一品種か
ヒメカンゾウ	永祿10 (1567)・5・26:姫萱草/Hemerocallis dumortieri か
マクワウリ	天正3 (1575)・7・12:「あふみ [近江] の <u>まくわのうり</u> とて, のふな か [織田信長], 一こ [籠] しん上」
氷砂糖	天正9 (1581)・6・1:砂糖は贈答に多出するが, 氷砂糖は少ない。 本節(4)の「砂糖」参照

(2) 初出に準じる用例

初出ではない, あるいは初出とは断定できないが, かなり早い用例で初出に準じる場合も, 次に挙げておく。注記中の『下学集』は, 永祿2年識語本(注9)によった。また, 『文明本節用集』は15世紀末頃(15C末)頃の成立とした(注10)。*は第5節参照。

アサクラザンショウ	慶長5 (1600)・1・20:初出は『多聞院日記』天正11 (1583)・2・11
イチハツ	永祿6 (1563)・4・9:初出は『文明本節用集』(15C末)
イチョウ	永祿4 (1561)・5・17:「いちやうの木」/初出は『下学集』(1444)
イワタケ	延宝4 (1676)・7・20:地衣類, 食用/初出は『撮壤集』(1454)
ウグイスタケ	文明9 (1477)・①・28:初出は『山科家礼記』応仁2 (1468)・2・26

エダマメ	大永7 (1527)・7・8 : 『 ^{のりとき} 教言卿記』 応永12 (1405)・9・29に初出
オグルマ (小車)*	永禄5 (1562)・6・15 : 以後多出 / 『山科家礼記』 延徳3 (1491)・7・17に初出
オニユリ	永禄1 (1558)・5・23 : 初出は『蔭涼軒日録』 明応1 (1492)・5・15
オモト*	天文7 (1538)・11・30 : 初出は『温故知新書』 (1484)
ガンピ (ナデシコ科)	天文11 (1542)・5・9 : 以後多出する / 初出は『蔭涼軒日録』 延徳2 (1490)・6・18
キンカン (金柑)	文明15 (1483)・11・15 : 初出は『下学集』 (1444)
ギンナン (銀杏)	延宝4 (1676)・4・9 : 初出は『天正18年節用集』 (1590)
クネンボ	天正8 (1580)・11・1 : 「くねんほう」 / 『文明本節用集』 (15C末) に「久年父 クネンフ」として初出
コウライギク	永禄6 (1563)・4・5 : シュンギクの異名? / 初出は『蔭涼軒日録』 長享2 (1488)・3・22
サクラソウ*	明応5 (1496)・②・6 : 「さくらくさ」 / 初出は『山科家礼記』 延徳3 (1491)・2・21の「桜草」
サザンカ	延宝4 (1676)・10・4 : 初出は山内千代書簡 (1606~17頃 : 『山内一豊と千代』 [岩波新書、2005])
シャクナゲ	明応1 (1492)・10・11 : 「しやくなん花」 / 初出は『下学集』 (1444)
シュウメイギク (秋明菊)	元亀2 (1571)・9・9 : 「しやうめいきく」 : 初出は『文明本節用集』 (15C末)
スイセン	長享2 (1488)・10・15 : 「すいせん花」 / 初出は『下学集』 (1444)
センノウ	文明9 (1477)・7・6 : 「せんおうけ」 / 初出は『後深心院関白記』 永和4 (1378)・8・3
センリョウ	享禄1 (1528)・11・19 : 「せんれうくわ」 / 『温故知新書』 (1484) に初出
ソテツ	天正16 (1588)・4・25 : 「くわんはく殿 [秀吉] より……そてつ御しん上あり, せいりやう殿 [清涼殿] に, うへらるる」 / 『蔭涼軒日録』 長享2 (1488)・9・16に初出
ツクシ*	延宝7 (1679)・3・14 : 「つくし」 / 当時は「つくつくし」が普通で, 「つくし」の呼称は珍しい
ハツタケ*	延宝6 (1678)・8・29 : 『山科家礼記』 文明12 (1480)・9・2に初出
ハナワラビ	延宝4 (1676)・3・4 : 初出は『多識編』 (1631)
ヒガンザクラ	天文1 (1532)・2・11 : 初出は『蔭涼軒日録』 明応2 (1493)・3・6
ビャクシン	長享2 (1488)・2・10 : 初出は『蔭涼軒日録』 寛正3 (1462)・12・12
フキノトウ*	明応3 (1494)・1・22 : 初出は『山科家礼記』 文明4 (1472)・2・12

ブシュカン	寛永2 (1625)・12・18:「ふしゆかん」=仏手柑/初出は『ラホ日辞典』(1595)
フユボタン	貞享1 (1684)・9・12:初出は『増続・山の井』(1663) →本節(5)
ヘキトウ (碧桃)	天文10 (1541)・3・16:「碧桃」, 白花の桃/初出は『下学集』(1444)
ハウセンカ	天正15 (1587)・8・23:初出は『撮壤集』(1454)
ミヤマシキミ*	大永6 (1526)・11・26:「み山しきみ」, 以後多出/『山科家礼記』文明12 (1480)・9・5に初出
ムカゴ	永禄3 (1560)・9・11:古名ヌカゴ/初出は『温故知新書』(1484)
ムクゲ	延徳3 (1491)・2・3:初出は『下学集』(1444)

(3) 花銘の類

『お湯殿の上の日記』には菊・桜・梅などの花銘と思われる名も記されている。以下、それを年次順に示しておく。原本が仮名書きの場合は、適切な漢字を充てた。関連資料として、『言継卿記』と『蔭涼軒日録』の花銘も加えた。掲出例は、それぞれの資料での初出。

●菊の花銘: 記号*については、本項の注記①を参照

『お湯殿の上の日記』:「太白・紅菊・酔楊妃・都忘・梅菊」は『言継卿記』にも出る

*太白	明応5 (1496)・9・18:「たいはく」, 以後多出し, 大永6年 (1526)には3件の記事がある
*紅菊	永禄2 (1559)・2・12:「こうきく」/赤い菊の一般名かもしれないが、『画菊』に花銘「紅菊」がある
桜菊	永禄2 (1559)・9・6:元亀3 (1572) 8・25に再出
*酔楊妃	永禄2 (1559)・10・4:初出は『温故知新書』(1484)
黄太白	永禄5 (1562)・2・10:「き大はく」
*天竜寺	元亀2 (1571)・10・6:以下7品は本項注記②参照
*南禅寺	元亀2 (1571)・10・6
都忘	元亀2 (1571)・10・6
*梅菊	元亀2 (1571)・10・6
*小紫	元亀2 (1571)・10・6
*濡鷺	元亀2 (1571)・10・6
*狸々	元亀2 (1571)・10・6:「しやうしやう」

(注記①) *を付したのは、『画菊』(国会図書館蔵)にも記されている花銘である。図譜『画菊』の出版は元禄4年(1691)だが、全100点の原画は天文18年(1549)に没した潤甫が描いたといわれ、上記資料とほぼ同時代のもの。ただし、『画菊』の花銘「大梅菊・小梅菊」を上記の梅菊、「大濡鷺・小濡鷺」を濡鷺、「大狸々・小狸々」を狸々、「朝日」を朝日菊、「等持寺」を等持寺菊と同じとした。

(注記②) 元亀2 (1571) 年10月6日条に「中みん中将、てんりう寺・なんせん寺・みやこわすれ・梅きく・小むらさき・ぬれさき・しやうしやう、七色。御かたの御所まで、ちさん〔持参〕にてまいる」と7つの花銘を記す(注11)。

『言継卿記』：第4節参照

- *朝日菊 永禄2 (1559)・10・11：「珍敷^{めずらしき}之間、進上申了」
- *太白 永禄6 (1563)・3・7
- *金鈴 永禄9 (1566)・9・18：「珍敷花也」
- 大紫 永禄9 (1566)・11・29：元亀2 (1571)・3・15に再出
- *梅菊 永禄9 (1566)・11・29
- *酔楊妃 永禄9 (1566)・11・29
- *紅菊 元亀2 (1571)・3・4
- 河原院 元亀2 (1571)・3・4
- てり香 元亀2 (1571)・3・15
- 都忘 元亀2 (1571)・10・9

『蔭涼軒日録』

- *等持寺菊 文正1 (1466)・5・21

●桜の花銘

『お湯殿の上の日記』：普賢象～彼岸桜の4品は、『蔭涼軒日録』にも出る

- 普賢象 文明12 (1480)・3・11
- 糸桜 文明18 (1486)・2・26：いまの枝垂桜^{しだれ}
- 一葉桜 明応7 (1498)・3・21：記載名「一ようさくら」
- 彼岸桜 天文1 (1532)・2・11
- 百日桜 天正1 (1573)・7・20
- 地主桜 天正11 (1583)・3・1：記載名「ちしゆのさくら」
- 海棠桜 慶長3 (1598)・3・4

『蔭涼軒日録』

- 桐谷桜 寛正5 (1464)・2・21：「桐谷」は「きりがやつ」または「きりがや」
- 一葉桜 長享1 (1487)・2・23
- 糸桜 長享2 (1488)・2・14：いまの枝垂桜^{しだれ}
- 信濃桜 長享2 (1488)・2・14：「信州桜」「信桜」とも記している
- 普賢堂 延徳3 (1491)・9・4：移植した月日／「普賢象」と同品
- 彼岸桜 明応2 (1493)・3・6

●梅の花銘

『お湯殿の上の日記』：鶯宿梅・大白梅・和泉式部の3品は、『蔭涼軒日録』にも出る

鶯宿梅	文明10 (1478)・2・24:「わうしゆく」=鶯宿。大永7年(1527)～天文2年(1533)に記事が十数件あり、この頃流行か/初出は『看聞御記』永享9(1437)・2・28
大白梅	天文2 (1533)・3・12:天文11・3・14, 同20・2・27にもあり
和泉式部	永禄3 (1560)・2・12
軒端梅	永禄3 (1560)・2・28:和泉式部と同品かもしれない
桜梅	天正8 (1580)・5・8
『蔭涼軒日録』	
大白梅	文正1 (1466)・2・15:「大白梅・泉式部・鶯宿梅, 此三色梅花二十朶」
泉式部	文正1 (1466)・2・15
鶯宿梅	文正1 (1466)・2・15
南庭梅	延徳2 (1490)・3・3

(4) 食品類

●ミカンの類

柑橘類はしばしば贈答に用いられており、ミカン、カラミカン、キンカン、クネンボ、ダイダイ、トウクネンボ、ブシュカン、柑子の名が現われる。ミカンは大半が「みつかん」(=蜜柑)と記されている。

延宝3～7年(1675～79)には、伊予蜜柑、紀伊蜜柑、肥後蜜柑、備中蜜柑、八代蜜柑など、産地名を付したミカンが増える。各地の栽培が軌道に乗り、特産品が生れたのであろう。

上記の頃、紀伊藩主は毎年、蜜柑・忍冬酒・鯨の紀州名産3品を献上するのを恒例としていた。紀州の蜜柑は天正3年(1575)に肥後八代産の苗木を移植したのが始まりと伝えられ、江戸時代初頭には名産品となっていた。忍冬酒は、スイカズラの干した葉・茎と焼酎の混成酒で、薬用に用いた。鯨については、3節「動物」の「鯨の献上」の項を参照。

●キノコ類

松茸はもとより、ほかのキノコも毎年恒例の献上品によく使われており、「いぐち、いわたけ、うぐいすたけ、さまつだけ(早松茸)、しいたけ、しめじ、なめすすき(ナメコ、エノキダケ)、ねずたけ(鼠茸=ホウキダケ)、はつたけ、はりたけ(針茸)、ひらたけ、まつたけ」の12種類を数える。うち、「いわたけ」は地衣類。「うぐいすたけ」は *Russula fragilis*, 別名コベニタケ、ヒガンダケと思われる。食用になる。

また、椎茸の記事は貞享2年(1685)より前はわずか3件だが、同年に突然6件も現われる。豊作の年だったのかも知れないが、栽培品の可能性も考えられる。多くの書物は椎茸栽培を元禄年間(1688～1703)に始まるとするが、それより多少早かったのではないか。

●砂糖

当時の砂糖はすべて高価な輸入品で、上流階級での贈答品に時々用いられた。日記での初出

は文明17年(1485)3月13日で、以後時々記録されているが、天正初年から件数が増えはじめ、たとえば天正9年(1581)には計6件がある——1月9日(しろきさたう)、2月8日(さたう)、6月1日(こほりさたう:氷砂糖の初出)、7月10日(しろきさたう)、8月17日(こほりさとう)、11月4日(さたう)。

江戸時代の貞享2年(1685)頃になると、普通の砂糖の献上は見られなくなり、献上されるのは氷砂糖ばかりとなる。

(5) 冬牡丹

フユボタンはボタンの変種で、初夏と冬に開花するが、俳書『増続・山の井』(1663)に季語として「冬牡丹」の語が初出するので、江戸時代初期に出現したといわれる。『お湯殿の上の日記』にはそれに該当する牡丹記事が延宝8年(1680)に初めて現われ、天和3年(1683)以後連続する。表1に、それを整理した。

表1 冬牡丹の記事

No.	和暦	太陽暦	献上者	記載名	春夏の牡丹記事
1	延宝 8・⑧・6	1680・9・28	中院大納言	牡丹	延宝 8年: 5件
2	天和 3・9・13	1683・11・1	西本願寺	ほたん	天和 3年: 16件
3	天和 3・9・22	1683・11・10	新院の御方	ほたん	
4	天和 3・9・29	1683・11・17	伏見殿	ほたん	
5	貞享 1・9・5	1684・10・13	大炊御門前内府	ほたん	貞享 1年: 16件
6	貞享 1・9・12	1684・10・20	伏見殿	冬ほたん	
7	貞享 1・9・15	1684・10・23	一乗院宮	ほたん	
8	貞享 2・8・29	1685・9・27	醍醐中納言	ほたん	貞享 2年: 24件
9	貞享 3・8・24	1686・10・11	中院中将	ほたん	貞享 3年: 0件*
10	貞享 3・8・27	1686・10・14	本院の御方	ほたん	
11	貞享 3・10・2	1686・11・17	八条宮	ほたん	
	貞享 4**				貞享 4年: 20件

* 貞享3年春夏には個々の花名を記した記事がほとんど無い。記録者が花に関心が薄かったことが、春夏牡丹記事ナシとなってしまったと思われる。

** 本書は貞享4年4月以降を欠く。

この表にあるように、延宝8年以降は太陽暦9月末～11月に開花するボタンが献上されており、これは現在の冬牡丹(寒牡丹)に相当する種類と思われる。しかし、その頃に京都で冬牡丹だけが急に流行したわけではないらしい。初夏に花を咲かせる普通の牡丹の献上数も、やはり天和3年頃から急増しているからで、この頃牡丹全体が京都で流行し、その一環として冬牡丹の栽培も増えたのではないかと思われる。いずれにしても、このデータは、初期の冬牡丹がいつ頃開花していたかを示すもので、冬牡丹の改良史にとっては興味がある。

3 動物の記述

(1) 初出動物名

『お湯殿の上の日記』には、食用の鳥類・魚介類や愛玩動物の名も豊富である。そのうち、初出の名を以下にまとめる。注意事項は第2節(1)を参照。

アイカモ	延徳1 (1489)・2・24: マガモとアヒルの雑種
アナゴ	天文9 (1540)・8・14: 「あな御」
イイダコ	明応5 (1496)・12・30
ウミタケ	慶長6 (1601)・5・13: 二枚貝, 大きな水管は美味な食品
ウミヒバ	明応4 (1495)・5・7: 「いせ [伊勢] 御みやげ色々……うみひは・うみせりなどもまいる」, ウミヒバはサンゴの親類で, 枝を乾燥して飾り物にしたと思われる。「うみせり」も同類か
キビタキ	文明16 (1484)・11・7
コマドリ	文明12 (1480)・5・14
ハシビロガモ	文明17 (1485)・2・13: 「はしひろ」
ミヤマセキレイ	文明16 (1484)・10・1: 「見山せきれい」

(2) 初出に準じる用例

植物に倣って, 初出ではないが, かなり早い時期の用例と思われる場合を挙げる。注意事項は, 第2節(1)(2)を参照。

アカガイ	文明15 (1483)・4・8: 初出は『教言卿記』応永13 (1406)・11・23
アカガシラ	文明17 (1485)・2・13: 初出は『鴉鷺合戦物語』(1481以前)
アサリ	寛永2 (1625)・4・4: 「あさりかい」/初出は『易林節用集』(1597)
アヒル	天正15 (1587)・2・19: 初出は『文明本節用集』(15C末)
アンコウ	寛永2 (1625)・2・28: 初出は『精進魚類物語』(1452頃)
カワガラス	延宝4 (1676)・2・22: 初出は『日葡辞書』(1603)
クモダコ	天文13 (1544)・8・22: 蜘蛛蛸はテナガダコの異名/初出は『山科家礼記』文明9 (1477)・8・1
ゴイサギ	天正15 (1587)・5・3: 初出は『鴉鷺合戦物語』(1481以前)
コチ	文明18 (1486)・7・4: 初出は『続草庵集』(1366頃)
サヨリ	明応1 (1492)・4・10: 初出は『山科家礼記』長享2 (1488)・6・28の「さより」/『看聞御記』永享2 (1430)・4・29の「さいり」もサヨリかもしれない
シマヒヨドリ	天文7 (1538)・6・20: 初出は『親俊日記』同年5・3, ➡本節(7)

タイラギ	寛永2 (1625)・8・30:「たいらけ」／初出は『武家繁昌』(室町末)
タニシ	天文8 (1539)・3・9:初出は『文明本節用集』(15C末)
トリガイ	天文11 (1542)・12・12:初出は『精進魚類物語』(1452頃)
ナマコ (生海鼠)	永禄5 (1562)・11・22:初出は『 ^{あいのう} 嗔囊鈔』(1446)
ヒシクイ	文明9 (1477)・12・10:初出は『看聞御記』応永29 (1422)・2・16
ホオジロ	天正15 (1587)・4・15:「ほしろ」／初出は『文明本節用集』(15C末)
マナガツオ	明応4 (1495)・11・5:初出は『看聞御記』永享5 (1433)・10・15
ムクドリ	天和2 (1682)・9・1:初出は『鴉鷺合戦物語』(1481以前)

(3) 鯨の献上

文明13年(1481)4月16日条の「むろまち殿 [將軍] より、くちらのあらまき卅まいる」を初めとして、鯨の献上は全期間にわたって見られる。ただし、15世紀後半から16世紀前半までは数年に1回くらいの割合で、天文年間の後半から永禄年間末近くまでの四半世紀ほどはまったく鯨が献上されていない。おそらく、この頃までは偶然に入手した鯨を利用する程度だったのではないだろうか。ほぼ毎年鯨が献上されるようになるのは天正9年(1581)の頃からで、17世紀に入ると献上が年に3回とか5回の年も現われる。おそらく、鯨漁がかなり積極的に行なわれるようになったのであろう。

『鯨史稿』によれば、元亀年間(1570~72)に三河国内海で鯨の突取り漁法を始めたというが、『お湯殿の上の日記』には天正10年(1582)から文禄4年(1595)までのあいだで現存する8年分の日記に7件の鯨献上記事があり、うち6件が伊勢に関連している。天正14年の記事は「いせのせんちう寺より、ととしのくじらのおけ二つ」とあって、伊勢からの鯨肉の献上が毎年の恒例になっていたことがわかる。

一方、江戸時代初期に紀伊熊野太地浦近辺で鯨猟が盛んになり、延宝5年(1677)にはこの地で網取り法が考案され、この手法が広まって鯨猟が全国的に盛んになる。第1節(4)・ミカンの項で、延宝~貞享年間頃には紀伊藩からの鯨の献上が毎年の恒例となったことを述べたが、それは上記の網取り法の開発などが関係していたに違いない。

(4) 白鳥の献上

『お湯殿の上の日記』を見ると、初めは毎年数回ずつ白鳥が献上されているが、やがてその回数が減少する。そこで、適宜に数期を区切り、年ごとの記事数を出してみた(表2, 注12)。

15世紀後半から16世紀の第1四半期にかけては年4回ほど献上されていたのが、16世紀の第2四半期以降減少し、その後やや回復したようだが、17世紀後半には急減している。原因は不明だが、京都周辺への白鳥飛来が16世紀初め頃を境にして減少したように思える。

なお、ハクチョウは古くから「くぐい」(鶺鴒)と呼ばれており、この日記でも最初は一様に「くぐい(ゐ)」と記されているが、永禄11年(1568)に初めて「はくてう」の名が登場し、徐々に後者の呼び名が増え、天正15年(1587)頃には「くぐい」の表記がほぼ消え去る。もっ

表2 白鳥の献上記事数

期間	白鳥記事 (A)	期間の年数 (B)	A/B
文明 9 ~延徳 3 (1477 ~ 1491)	60 件	15 年	4.00
明応 1 ~享禄 4 (1492 ~ 1531)	60 件	15 年	4.00
天文 1 ~天文 23 (1532 ~ 1554)	37 件	23 年	1.61
弘治 1 ~元亀 3 (1555 ~ 1572)	19 件	18 年	1.06
天正 1 ~天正 19 (1573 ~ 1591)	30 件	15 年	2.00
文禄 4 ~慶長 15 (1595 ~ 1610)	27 件	11 年	2.45
延宝 3 ~貞享 4 (1675 ~ 1687)	5 件	13 年	0.38

とも、『看聞御記』では永享7年(1435)頃から「白鳥」の呼び方が珍しくない。

(5) 鶴の献上

上記の白鳥とは対照的に、日記の始まる文明9年(1477)からほぼ1世紀のあいだ、鶴類の献上は非常に少なく、文明15年(1483)から明応9年(1500)にいたる18年間は鶴の献上記録が1件も無い。それが増加しはじめるのは天正3年(1575)頃からで、天正14年(1586)頃以降は、ほぼ毎年連続して数羽ずつ献上されるようになる。江戸時代に入ると徳川家康以来、將軍家から毎年御鷹の鶴(將軍が江戸周辺の鷹狩で獲った鶴)を天皇に献上するのが恒例になるが、一方では地元からの献上も増えている。

この変化が始まった天正14年には興味深い記事が日記に現われる。それは同年の11月5日条で、「御てんのうへにつる五は、まふ。みなみな御らんする」——現代表記にすると、「御殿の上に鶴五羽舞う。皆々、御覧ずる」。このような記事は全冊を通してこの一カ所だけであり、よほど珍しかったのではないと思われる。この記事も含めて推察すると、白鳥の減少とは逆に、鶴類は京都周辺への飛来数が16世紀末頃から増えはじめたのではないだろうか。

なお、品名を記すのはわずか1例、天文8年(1539)12月11日の「くろつる」だけで、ほかはすべて「つる」。

(6) 貝覆い

「貝覆い」はハマグリ360個(または180個)の左右の殻を分け、左殻をすべて並べておき、1個ずつ出される右殻に合う左殻を探し出して取り、取った数を競う遊びである(「貝合」とも称するが、これは誤用で、本来の「貝合」は種々の貝殻を互いに出し合って美しさを競う別の遊戯である)。宮廷では貝覆いが平安の昔から盛んであり、『お湯殿の上の日記』を見ると、室町時代にもしばしば行なわれていた。

日記の翻刻されている期間は、後土御門・後奈良・正親町・後陽成・靈元の諸天皇の時代に相当するが、そのうち貝覆いをもっとも好んだらしいのは後奈良天皇(在位、1526~57)で、初めは年間に10回ほどだが、在位末期の天文20年(1551)には39回、弘治元年(1555)には48回も貝覆いを行なっている。

(7) 外来動物

海外産の獣1件の記事と鳥7件だけで、予想より少なかった。注目されるのは下記の水牛とシマヒヨドリ。それ以外は文明14年(1482)3月21日のインコと天正17年(1589)3月29日の孔雀しか名がわからない。

●水牛

文明9年(1477)11月17日に「すいきう[水牛]まいりて、御らんせらるる」の記録がある。『日本書紀』に、天智10年(671)6月、新羅から水牛1頭が献上されたとあるのが初渡来で、次は文明4年(1472)、大内教弘が明より2頭を取り寄せ、うち1頭が京都に来たと『後鑑』に記録されている。『お湯殿の上の日記』の記録はそれに次ぐ3例目だが、残念ながら、上記の引用が全文で、詳しい事情は不明。

●シマヒヨドリ

天文7年(1538)6月20日に「ふけ[武家=足利将軍]より、しまひよとりまいる」の記事がある。じつは、『親俊日記』(注13)同年5月3日条に「親俊の父、蜷川親順ちかのぶが細川殿に嶋鶉(シマヒヨドリ)を献上した」旨の記事、同年6月13日条に「江州山徒、嶋鶉、公方様[将軍足利義晴]へ遣上之」の記載がある。『お湯殿の上の日記』にあるのは後者の個体と思われる、将軍がさらに天皇に献上したと解せる。シマヒヨドリは江戸時代には数多く輸入されたが、本年以前の記録は無いようであり、天文7年が日本への初渡来らしい。

4 『言継卿記』

冒頭にも言及したように、禁中に出仕していた山科言継とぎつぐの日記『言継卿記』(注6)は『お湯殿の上の日記』を補う同時代資料であるので、目にとまった記録をこの節でまとめておく。

●ブッソウゲ(仏桑花)

『徳川実紀』慶長14年(1609)12月26日に「薩摩藩主島津家久が徳川家康に仏桑花と茉莉花(マツリカ)を献上した」旨の記事があり、これが両種の初渡来と従来いわれてきたが、最近『新撰類聚往来』(明応~永正年間=1492~1520成:注14)に「仏勝花・茉莉花」の名が出ていくことに気付いた。そこで、室町時代に両種が渡ってきていた記録が他資料でも確かめられないかと、諸資料を注意していたところ、この『言継卿記』の記事を見つけた。

最初の記事は天文13年(1544)5月7日で、「予、万里小路中納言兩人、参御前[天皇]、四時分迄御雑談候了、庭之仏笑花二枝進上了、其外御局々へ二枝三枝宛進候了」とある。自分の家で栽培したブッソウゲを御所に献上したのだが、当日の『お湯殿の上の日記』には該当記事が無い。

この件を含めて天文13年には4件、14年2件、15年1件(以後は「仏桑花」の表記)、19年4件、22年1件、23年3件、計15件のブッソウゲ記事がある。熱帯産の種類を年を越えて進上しているところを見ると、屋内に取り入れて越冬させたとしか考えられないが、特別な越冬技術がすでにあっただろうか、いまのところ傍証を得ていない。

なお、マツリカについては、『新撰類聚往来』以外の記載資料にまだ出会っていない。

●菊の品種

永禄7年(1564)2月18日に、山科言継は禁裏の小御所の庭に菊の植付を命じられ、「菊共、予請取之分に卅三種栽之……中山・四辻兩人分廿五種敷」と記す。合計58種となり、御所には約60品種の菊が植えられていたことがわかる。また、元亀元年(1570)10月13日条には「堀川近江守国弘朝臣宅へ罷向、菊見之。四十種計有之」とある。永禄9年(1566)3月14日条に「菊之種、十八色持参了」と記しているので、言継自身は少なくとも20種ほどを栽培していた。

個々の花銘については、第2節(3)に示したが、念のために『言継卿記』の文をいくつか引用しておく。()内は割注。

- 永禄9年(1566)9月18日：「若宮御方へ菊(金鈴)一枝持参了。珍敷花也」
- 同年11月29日：「菊之種三色、すいやうひ[酔楊妃]・梅菊・大紫等、所望之間、遣之」
- 元亀2年(1571)3月4日：「曇花院殿へ参。夏菊之種御所望之間、紅菊・太白・河原院・黄小菊、四種持参」
- 同年3月15日：「菊之種(てり香、大紫)……遣之」
- 同年10月9日：「親王御方へ菊二本(都忘、うす紫)持参、進上之」

●木綿

天文21年(1552)8月17日条に「官女茶々、唐人蒼風に木綿一端(代十疋半)、去年借用」とある。「一端」は「一反」。本資料にはこれを初めとして、弘治3年(1557)、永禄8年(1565)、同10年(1567)、元亀元年(1570)と、「木綿」の語が計5回使われており、後の4件は贈答記事である。『国史大辞典』(吉川弘文館)などによると、木綿は13世紀初頭には知られており、15世紀後半には国内生産が始まった。本資料が示すように、16世紀なかばには上流階級では相当普及していたが、まだ贈答に用いる貴重品だったように思われる。

なお、『下学集』(1444)の絹布門に「木綿」があり、永禄2年本では「モンメン」、黒川本では「モメン」の読みが付されている。

5 『山科家礼記』

山科家の家礼(雑掌)が記した『山科家礼記』(注7)は、『お湯殿の上の日記』の補助にと考えて調べはじめたのだが、予想以上に有意義な博物誌資料であった。とくに注目されるのは、筆者の一人沢久守がしばしば禁中に呼ばれて花を立てた折の記録である。

一例として長享2年(1488)1月10日の記事の一部を挙げると——「禁裏、花ニ予参候……御前花、心松、左前又小松、右ワウハイ・センマイ、左キンセンクワ……」。このように草木の名が多出し、黄梅花や蝦梅、白丁花(ハクチョウゲ)がすでに渡来して立花に使われていたなど、興味深い記述が少なくない。もちろん、本来の職務にかかわる贈答などの記録にも、いろいろな動植物の名が含まれている。

そのなかには初出、あるいは初出の可能性のある種類や呼び方も少なくないので、以下、主要な事例を挙げる。「」は記載名、〰を付した品名・呼称は初出と思われる例、〰〰は初

出かもしれない例, *を付したのは大沢久守の立花記事に含まれる草木である。それ以外の記載様式は、第2節(1)(2)に準じている。

●植物

- ウグイスタケ 応仁2 (1468)・2・26:「鶯たけ一折進入也」
- ウツボグサ 延徳3 (1491)・5・24:「ウツボ草」*
- ウラジロ (裏白) 文明12 (1480)・12・29:「うらしろ」, シダ類/延徳3 (1491)・12・30
には、「正月かい物……ゆつりは・うらしろ」
とある
- オウバイ (黄梅) 長享2 (1488)・1・10:「ワウハイ」*/全4例, うち1例は「ワウ梅」
- オグルマ (小車) 延徳3 (1491)・7・17:「ヨクルマ」* →第2節(2)
- オモト 長享2 (1488)・1・19:「ヨモト」*, 初出は『温故知新書』(1484)
- カラマツ 長享2 (1488)・10・14:「唐松二本」
- キクラゲ 文明9 (1477)・3・6:「木くらげ」/「木耳」は古くから使われているが、「きくらげ」の呼称は初めて
→チョウロソウ
- ギンセンカ
- キンポウゲ 文明18 (1486)・4・1:「キンポウケノタネ」(金鳳花)
- クリンソウ →ホウトウゲ
- ケマンソウ 延徳3 (1491)・4・22:「ケマンケ」(華鬘花)*, 中国原産/初出は『尺素往来』(1481以前)
- コカキツバタ 延徳3 (1491)・4・28:「小かきつはた」/朝鮮・中国産の外来種
- サクラソウ 延徳3 (1491)・2・21:「武家[足利将軍]へ桜草・ほうとうけのたね」
/読みは「さくらくさ」か →第2節(2)
- シャガ 延徳3 (1491)・1・14:「シヤクワノ葉」*, 『文明本節用集』(15C末)
にも記載
- ゼンマイ 長享2 (1488)・1・10:「センマイ」*, 初出は『温故知新書』(1484)
- チョウシュン白花 延徳3 (1491)・4・24:「白チャウシュン」*/長春(コウシンバラ)は
建保元年(1213)以前に渡来していたが、原種は紅色で、白花の記載は初めて
- チョウロソウ 明応1 (1492)・5・24:「テウロサウ」* が原記載名で、ギンセンカの別名。
(朝露草) 漢名は野西瓜苗, 中部アフリカ原産, 中国を
經由して渡来したと思われる。午前中に萎む
のを, 朝露のはかなさに見立てた
- ツクシ 寛正4 (1463)・4・1:「つくし, うへ候也」/当時は「つくつくし」
の呼称が普通であり、「つくし」の呼び方はあまり見られない →第2節(2)

<u>ニンニク</u>	文明4 (1472)・1・19:「ニンニク」／古くは「オオヒル」と呼ばれ、「ニンニク」の呼称は初出か
<u>ネジアヤメ</u>	明応1 (1492)・5・24:「ハリン葉」*／馬蘭(パリン)はネジアヤメで、『文明本節用集』(15C末)にも記載
<u>ハクチョウゲ</u>	延徳3 (1491)・4・22:「ハクチャウケ」(白丁花)*, 中国・台湾・インドシナに分布／翌々日にも使用
<u>ハツタケ</u>	文明12 (1480)・9・2:「はつたけ一籠」
<u>フキノトウ</u>	文明4 (1472)・2・12:「ふきのたう」
<u>ホウトウケ</u>	延徳1 (1489)・3・18:「ホウトケ」: 正しくはホウトウケ(宝幢花)で、クリンソウの別名 → サクラソウの項
<u>ミヤマシキミ</u>	文明12 (1480)・9・5:「みやましきひ」／『文明本節用集』(15C末)にも記載
ロウバイ(蠟梅)	明応1 (1492)・2・5:「らうはい」*／『温故知新書』(1484)に初出
●動物	
<u>アカガイ</u>	長祿1 (1457)・12・29:『教言卿記』 応永13 (1406)・11・23に初出
<u>エソ</u>	長祿1 (1457)・12・28:「ゑそ」
<u>キクメイシ</u>	長祿1 (1457)・8・4:「きくめいし」(菊銘石), 造礁サンゴの一種で、その粉を薬として使ったらしい
<u>クモタコ</u>	文明9 (1477)・8・1:「くもたこ二連」, 現テナガダコ
<u>サヨリ</u>	長享2 (1488)・6・28:「サヨリー折敷」 → 第3節(2)／「サヨリ」は初出だが、『看聞御記』永享2 (1430)の「サイリ」がより古い名かもしれない
<u>ハゼ</u>	文明4 (1472)・6・30:「はせうお, はちにあげ, ほくにつけ候」
<u>ヒシクイ</u>	長享2 (1488)・1・24:「菱喰」／初出は『看聞御記』 応永29 (1422)・2・16

6 おわりに

『お湯殿の上の日記』を中心に『言継卿記』『山科家礼記』なども含めて調べた結果、多くの動植物について新しい知見が明らかになった。そのうち特に注目されるのは、下記の草木が従来考えられていたより早く海外から渡来していたことである——オウバイ(黄梅), ギンセンカ(朝露草), コカキツバタ, ダイダイ, ニンジン(野菜), ネジアヤメ(馬蘭), ハクチョウゲ(白丁花), ハクモクレン, ブッソウゲ(仏桑花)。渡来植物以外では、オグルマやクリンソウ(宝幢花), サクラソウ, ヒガンバナ, ミヤマシキミなどが、立花に早くから使われていたことも意外であった。

ただし、冒頭でも述べたように、今回調べた資料は図や形態の記述を欠くので、記されてい

る名称の植物が現在その名で呼ばれている種類であるとの保証が無い点が気にかかる。したがって、引き続いて生花関係の古文献や、画家のスケッチ、当時の建築物に残る襖絵や彫刻を調べて、確認をとっていく必要がある。

注記

- (1) 磯野直秀, 博物誌資料としての『鳥写生図巻』, MUSEUM, 584号, 2003年。
磯野直秀, 博物誌資料としての『草花魚貝虫類写生』, MUSEUM, 590号, 2004年。
磯野直秀, 狩野重賢画『草木写生』, 慶應義塾大学日吉紀要・自然科学, 36号, 2004年。
- (2) 磯野直秀, 『日葡辞書』の動物名, 慶應義塾大学日吉紀要・自然科学, 34号, 2003年。
- (3) 御湯殿上(おゆどののうえ)は平安宮内裏の清涼殿にある部屋。『お湯殿の上の日記』は, そこに仕えた女官が記した。
- (4) 『お湯殿の上の日記』(翻刻), 続群書類従・補遺3(11冊), 続群書類従刊行会, 1957～66年。
- (5) 本稿では, 引用文の漢字と仮名に現行字体を用い, 句読点・振仮名を適宜加えた。引用文中の()は原注, []は磯野による注あるいは補足である。仮名が続くとき, 単語に下線を付して読みやすくした場合もある。月日欄の①②……は閏月。
- (6) 『言継卿記』(翻刻), 山科言継著, 国書刊行会編, 続群書類従刊行会復刻, 1998～99年: 大永7年(1527)～永禄2年(1559)および天正4年(1576)が残存。
- (7) 『山科家礼記』(翻刻), 大沢久守ほか著, 続群書類従刊行会, 1967～2002年: 欠落も多いが, 応永19年(1412)～明応元年(1492)が残存する。
- (8) 『蔭涼軒日録』(翻刻), 竹内理三編, 増補続史料大成, 臨川書店, 1978年: 相国寺鹿苑院蔭涼軒主代々の公用日記で, 永享7年(1435)～明応2年(1493)が残存。
- (9) 『下学集・三種』(影印), 東京大学国語研究室資料叢書14, 汲古書院, 1988年。
- (10) 『文明本節用集』(国会図書館蔵『雑書類書』)は成立年が記されていないが, 掲出語の注釈中に文明6年(1474)・延徳2年(1490)・明応3年(1494)の年記をもつ個所があるので, 15世紀末頃に成立と考えられる(中田祝夫, 『文明本節用集: 研究並びに索引』(改訂新版), 勉誠社, 1979年)。
- (11) 7品の花銘の最後が, 翻刻本では「しやうし」である。これに該当する花銘を室町時代から江戸時代初期のいろいろな資料で探したが, 見当たらないままに数カ月が過ぎた。ところが, 本稿を記しはじめたとき, これは「猩々」ではないかと, ふと思いついた。猩々を平仮名で書くと, 当時の筆記法では「しやう」の後に踊り字(反復記号)の「くの字点」を書くが, 「くの字点」はしばしば「し」に誤読されるからである。幸い, 国会図書館蔵の転写本『お湯殿の上の日記』(わ210.4-39, 55冊)には, この部分が含まれている。そこで, 当たってみると, まさに推定どおりだった。
- (12) ハクチョウの計数には, 『お湯殿の上の日記・主要語彙索引』(小高 恭編, 岩田書院, 1997年)から, 該当項目を集計した。なお, 本索引では「しろ御とり」も「白鳥」とし

ているが、文明14年12月28日の日記では「くくい」と「しろ御とり」が区別して記されている（明応5年12月1日も同じ）し、『日本国語大辞典』や『時代別国語大辞典・室町時代編』などでは「しろ御とり」を「雉」の女房詞とするので、集計に含めなかった。

- (13) 『親俊日記』(影印), 蛭川親俊^{にながわちかとし}著, 続史料大成, 臨川書店, 1967年: 残存するのは天文7～11年(1538～42) および同19年(1550)。
- (14) 『新撰類聚往来』(影印), 丹峰和尚著, 往来物大系・古往来12, 大空社, 1992年: 明応～永正年間(1492～1520)の成立とされるが, 影印本の底本は慶安元年[1648]の版本である。

謝辞

本稿を記すにあたって, 小笠原 亮 氏に生花関連資料などについて, また菅野 徹 氏にサザンカの初出資料について御教示をいただきました。心から御礼を申し上げます。

